沖縄タイムス 2012年5月27日（日）

「水」が結ぶ強い絆

高校生サミット閉会

【宮古島】高校生サミットには日本を含む15カ国、1地域の高校生62人が水環境をテーマに議論、26日のお別れパーティーと閉会式では、各国地域の民俗芸能や伝統芸能の演目を楽しみながら、国の枠を超えた友好の絆を確かめ合った。

サミット高校生事務局が企画・運営するパーティーでは、ホームステイのホスト家族も交え参加者がゲームや民俗芸能、バンド演奏を堪能。最後に「宮古島で築いた友情の絆を大切に、島と島、国と国を結ぶ懸け橋となるよう努力することを誓う」とする友情宣言を全員で読み上げた。

閉会式では、4日間の高校生島サミットのスライド映像上映後、参加者全員に修了証書が手渡された。

県宮古事務所の黒島師範所長は「皆さんは期間中、水環境を学び、各国首脳に提言した。今後も環境問題に関心を持ち、交流を続けてほしい」とあいさつ。

証書を受け取った宮古高校3年生の砂川裕磨くん(17)は「各国の文化や言葉に触れ、良い経験ができた。宮古の浄水や地下ダムの技術も世界に誇れると実感した。将来は国境を超えて仕事ができる人間になりたい」と将来の夢を話した。

これまでの島サミット関連行事で高校生による会議や提言は今回初。次回の開催は未定という。

大弦小弦

三重苦のヘレン・ケラーが最初に知った言葉は水だったという。師のサリバン先生はポンプから出る水に手を触れさせ、もう片手に「Water」と指で記した。感動したヘレンは次々と言葉を覚えていく▼大人の人体の成分は水が約66%、タンパク質が約16%、脂肪約13%とされ、水の構成比は高い。かの先生はまさに命の源である水を通じ、後の〝奇跡の人〟に命の尊さと明日の光を指す方向を教えた▼26日、太平洋・島サミットが閉幕した。首脳宣言の一方で注目されたのが高校生による水環境への提言だった。地域に適した水道設備、保護地域の設定…。提言は水に窮する切実な声にも聞こえた▼事実、安全な水が届かない地域は多いという。中でも南太平洋のサモアは今も上下水道が不十分で漏水率が高い。同国にはこれまで宮古島市が技術指導を行ってきた。今後、水の環境改善に期待がかかる▼太平洋だけでなく、世界は地球温暖化による水の不安が大きい。2020年以降、百年に一度の干ばつが欧州に起こるとの予測もある。食料不足や疫病、経済への影響も心配だ▼水の厳しさを知る沖縄。復帰後はダムや水道も拡充され、不安は減った。だが、いつ水不足に陥るかは分からない。水は大切に使おう―。若い力の提言から水の重さをあらためて教えられた。（中島一人）

〈2012・5・27〉